

博士（文学）佐藤恒雄氏の『藤原為家研究』に対する授賞審査要旨

藤原為家（一一九八―一二七五）は俊成を祖父、定家を父として鎌倉時代初頭に誕生し、土御門天皇から後宇多天皇まで九代の帝王の朝廷に出仕、常に宮廷歌壇の中心にあった歌人である。俊成・定家と続いた歌の家、御子左家の伝統を継承し、中世和歌の規範を示しつつ古典研究にも貢献した。冷泉家の典籍・文書として今日伝存する貴重な文化財の伝来に深く関わった人物でもあり、その存在は極めて大きい。

佐藤恒雄氏の『藤原為家研究』（二〇〇八年九月刊、笠間書院）は、この為家の伝記や各種の文学活動に照明を当て、多くの新見を提示して、鎌倉時代前期の和歌史の研究を深化せしめた労作である。

為家が宮廷歌人として最も充実した活動を見せた時代には、「擬古典主義」ともいうべき文学理念が支配的であったことを指摘した「序章 後嵯峨院の時代」に始まり、「第一章 伝記研究」では父定家の日記『明月記』や為家の家集『大納言為家集』その他の資料を精査することによって、これまでの諸家の研究を改めるべき詳細な

為家伝を描き出すことに成功している。『大納言為家集』に散在する羈旅歌を集成して、五六歳の為家が生涯に一度だけ試みた鎌倉往還の旅を考察した部分は、文化史的にも極めて興味深い問題を提起している。

「第二章 和歌作品」は為家の主要和歌作品群について考察した諸論文から成るが、中でも為家を含めて五人の作者の和歌を集成した「新撰六帖題和歌」に関する論は注目に値する。同書の諸伝本を博搜、分類する基礎的作業から始めて、その成立過程を追い、この試みの実質の主催者は為家であったと結論づけ、その和歌史的意味にも論及する。「七社百首」については、対立者藤原光俊（真観）に対する痛憤や老年・病苦に伴う悲哀を読み取りつつ、表現上の特色をも探る。『詠源氏物語卷之名和歌』に関しては、為家詠を疑問視する従来の諸説に対して、この作品群の技法・内容を分析、さらに歌壇状況を検討して、為家真作の可能性が極めて大であると主張する。

「第三章 勅撰和歌集」は為家が撰者とされて撰進された『続後撰和歌集』『続古今和歌集』の両集について、その成立過程や特質を考察した部分であるが、特に複雑な撰進過程を経て成立した『続古今和歌集』に関する諸論考では、『続古今和歌集竟宴記』『続古今和歌集目録』、勘解由小路経光の日記『民経記』などの資料を援用し

て、従来は漠然としていた成立に至る状況を明らかにしている点はこのことに高く評価される。

「第四章 歌学歌論」では、為家の代表的な歌論書とされる『詠歌一体』を対象とし、ここでも伝本の博搜、系統分類の作業を経て論を進め、同書の広本は為家の口伝を嫡男の為氏と孫にあたる冷泉為秀が成書化に関わって成った著作であるという結論を導き出している。そして為家の歌論は俊成・定家の二代に亘って伝えられてきた家説を骨格としつつ、御子左家とは対立的な関係にあった六条家の藤原清輔の歌学をも摂取していることを指摘する。

「第五章 仏事供養」並びに「第六章 自筆断簡」では、為家が行った父定家の供養、古典書写、書状などを解説して、伝記研究を補足する。

「第七章 周辺私撰集と真観」は、父定家晩年の弟子で当初は定家・為家に親近したが、定家没後為家から離反、対立した藤原光俊（真観）が深く関わった私撰集などの成立を考察しつつ、真観その人の伝を再検討し、新見を提示した諸論文から構成されている。真観伝において彼がまず漢詩人として出発したことを明らかにし、私撰集の関係では、『三十六人大歌合』や『新和歌集』の撰者について新見を提示している。

そして「終章 文書所領の譲与」においては、為家の側室阿仏尼

の旅日記『十六夜日記』を生む因をなした係争に関する文書類を示してその解説を試み、御子左家の文書や所領を為家の晩年の子弟である冷泉為相が譲与された過程を考察する。その文化的意味は少ないであろう。

以上の本篇に附録として付載される「藤原為家年譜」は極めて詳細なもので、為家一個人にとどまらず、鎌倉時代前期の和歌・漢詩文関係事項をことごとく詳記しており、この期の和歌史・文学史研究に寄与すること多大である。

本書に先立って佐藤氏が刊行した『藤原為家全歌集』（二〇〇二年三月刊、風間書房）によれば、為家は六千余首の和歌を残している。あえて望蜀の言を述べるならば、『藤原為家研究』においては、為家の文学的営為が浮彫りされるように構成を工夫して、これら大量の作品世界が有する文学性の解明という難問に対して、さらに大胆に挑んでほしかったし、定家仮名遣いなどの国語学的な問題への論及があってもよかったと感じられなくもない。しかしながら、多年に亘る周到な資料の博搜や伝本調査にもとづく堅実な推論の結果得られた、多くの新事実や知見が学界全体の共有財産となり、今後の和歌史及び中世文学史の研究に大きく資するものであることは疑いない。よって本書は日本学士院賞を授与するにふさわしい業績であると考えるものである。